

第 21 回 漢字の話題あれこれ

久保 裕之（立命館大学専任職員

白川静記念東洋文字文化研究所文化事業担当）

2012 年 6 月 16 日



漢字の話題あれこれ

早川 皆さま、こんばんは。時間になりましたので、ただいまより第 21 回名田庄多聞の会を開催致します。本日来ていただきましたのは、ここにも書いてありますように、立命館大学専任職員の久保裕之さんです。久保さんは、白川静記念東洋文字文化研究所の文化事業担当でいらつしゃいます。それでは、久保さん、よろしく願い足します。

久保 皆さま、こんばんは。ただいまご紹介いただきました立命館大学の白川静記念東洋文字文化研究所で文化事業を担当しています久保裕之です。名田庄は何度か車で通ったことはありますが、このように話しをさせていただくのは初めてです。いつもは京都市に住んでいますので、名田庄は地図で見たり、安倍晴明とゆかりの深い土地であることはよく承知しています。前から気になっていたところではあります。今回、お招きいただき、漢字について話せるのはとてもありがたく、楽しみにしてうかがいました。

今日のタイトルは、「漢字の話題あれこれ」となっています。漢字はいろんな話が出来ます。皆さまも、生まれたときは別として、物心ついたときから今まで漢字を見なかつた日はなかつたと思います。ずっと使われているものです。それでも、こんなことは知らなかつたとか、いろんなことがあるかと思えます。今日は、本当に、漢字についてあれこれ、いろんな話をさせていただきたいと思つています。皆さまからいろいろな質問とか、それはどうかとか、自由に話ができるそういう機会に

したいと思っています。

白川静博士

白川静という名前を初めて聞いたという方はいらっしゃるでしょうか。正直に。はい、ありがとうございます。白川静というと、一番有名なのは漢字の学者であるということになっていまして、福井市の生まれであります。漢字を元にして古代の中国の人々の考え方や文化を、そして、そこから広がっていった東アジアの人々の考え方や文化を、明らかにしたいと思われた方です。白川静はそういう方ですが、今日は、クイズ形式で漢字のことを話したいと思います。楽しんでいただければと思います。クイズですので、間違ってもかまいませんので、どしどし参加していただければと思います。

白川先生がお生まれになったのは明治43年、1910年です。それで、ついこの間生誕100年を迎えられました。亡くなられたのが2006年、96歳でした。このスライドにありますように、漢文や古代の漢字学、古代の中国の考え方、それから日本の古典である万葉集等の研究もされています。白川先生は漢字学者ということになっていますが、本人はそう言われるのが余り好きでなかったのです。漢字を通してこういうことを勉強しなかった、研究しなかった、そういう方です。漢字は手段だったので、東洋というものを明らかにしたかったので、本人は「東洋学者」と呼ばれたかった。学位は文学博士、立命館でなく京都大学で

取られました。

福井市のお生まれですが、生家はフェニックス通りの大名町3丁目のバス停の前で、ここにはいま石碑が建っています。「白川静生誕之地」。これは県民の皆さまのご寄付で、記念事業として建てていただいたものであります。

白川先生の業績、『字統』『字訓』『字通』

白川先生の業績でなにか一番有名かというと、中国で1900年間正しいと信じられてきた辞書があります。『説文解字』というのですが、西暦100年に成立したものです。辞書ですので、漢字の成り立ちが書いてあります。それがずっと信じられてきたので、いわば水戸黄門の印籠のようなもので、全く誰も疑わなかった。『説文解字』に書いてあるのだから。その『説文解字』の説に代わる新しい漢字の成り立ちの体系を打ち立てられた方です。70歳で立命館大学を退官されたので、そのあと16年かけて、『字統』『字訓』『字通』の「字書三部作」といわれるものを完成された。2005年に文化勲章を受章されています。これは私たち立命館大学の誇りでもありますし、福井県が生んだ文化勲章受賞者です。『字統』『字訓』『字通』は、多分、本屋さんや図書館でご覧になったかと思いますが、私たちの大学では中国からお越しになった方々に特にお渡ししています。日本でこんなものが出来たのだと。

福井新聞には「漢字物語」というのが連載されていましたし、今年の4月からは、日刊県民福井でも一週間に一回、「白川静漢字抄」ということで白川先生の漢字のことが出ていますので、ご覧になることが出来ると思います。白川静の影響を受けた著名人として、松岡正剛さんが『白川静 漢字の世界観』を書いていますし、宮城谷昌光さんという中国を中心にした小説家も白川先生の説を積極的に取り入れた小説を書いています。

そして、この生誕地である福井県では、文化勲章受賞者であるということ、福井県民賞を差し上げたということですが、それだけでなく、白川先生の研究の成果を県民の人たちに還元したいということで、県の政策として、小学校を中心にして白川文字学の習得と、「文字の国福井」を全国に発信しています。

今日もって参りましたのは、県の教育研究所が作った「白川静の漢字の世界」です。これは辞書になります。1年生から6年生までの漢字を白川文字学に基づいて、小学生に分かるように作ってあります。もともとは県が作ったもので県内だけで使っていたものですが、昨年(2011年)の3月に平凡社から全国に販売されるようになりました。全国の本屋さんに出ています。聞いた話によりますと、昨年の8ヶ月くらいで35000部でています。辞書としてはかなり驚異的な売り上げです。小学校では、さらにワークブックを作っています。これも今年3月から平凡社から全国に発売されています。福井県の教育やその成果が全国に発信されています。

福井県は、皆さんご存じのように、全国の学力テストでも上位の成績を取っていますが、その原因がこのようなことにあるのではないかと、教育委員会では分析されています。私たちにもとてもありがたいことで、何とか福井での例が全国に広がることを希望します。

クイズ

それではこれからクイズに入ります。

次の4人の写真のうち、白川静はどれか番号でお答えください。それでは、1番だと思われる方、はい、お一人ですね、ありがとうございます。2番だと思われる方、3番だと思われる方、4番だと思われる方(笑) (4番はフィギュアスケートの荒川静香)。3番が白川静先生です。皆さん、さすが郷土の偉人だけあって正解です。(2番、松本清張)。1番はどなたでしょうか。お分かりになりますか?、ならなと思います、私どもの学園の理事です(爆笑)。

第2問、エピソードクイズです。「次の四つの白川静に関するエピソードのうち、嘘はどれか、番号で答えなさい」。これは白川静の学問というより人間的な面に関することです。4つありますが、この中にひとつだけ嘘があります。

問題

① 95歳の白川静(しらかわしずか)は自分と一字違いのトリノ五輪の金メダリスト・荒川静香(あらかわしずか)の大ファンとなり、毎朝の散

歩のときに「イナバウアー」をしていた。

② 白川静は番組史上最年長ゲスト(当時89歳)として「料理の鉄人」に出演したが、料理の判定はせず専ら「食と漢字」について講釈し、司会の鹿賀丈史をいらつかせた

③ 白川静はメカにも強く、電子辞書を愛用し、GAMEBOYで囲碁や将棋を楽しんでいたが、95歳の時について「UFOキャッチャー」にも挑戦した。

④ 白川静96歳の最期の言葉は、病室の天井にあるシミを見て家族に「目の前に原稿用紙があつて所々に甲骨文字が書いてある。何と書いてあるのか。」であった。

ひとつだけ嘘がありますが、どれでしょうか。

(1番から4番まで、会場の人が順に手を挙げて答える)

ありがとうございます。これは出題者の意図通り答えがばらけてきました。正解を言います。2番だけ、嘘です。あとは全部本当の話です。ちよつと解説をしていきます。

① このスライドにあるように、荒川静香が金メダルを取ったのをとても喜ばれました。先生はとても規則正しい生活をされていまして、朝6時にいつも起きておられました。近所を散歩して、朝ご飯を食べて午前中は仕事。2、3時間は自分の書齋で机に向かつて一日原稿20枚、このペースは亡くなられる一ヶ月前まで続けられていました。お昼ご飯を食べて、昼寝をして、午後はお客さんと会われたりして、夕方6時に夕飯、ちよつとテレビを見ておやすみになる、そういう毎日でした。こ

れを365日やつておられた。盆正月関係なく。文化勲章ももらいに行かれなかった、時間がもったいないので。文化勲章は文化庁が京都までもつてこられて、それを受け取られた。そういう方です。

スケートの放送は夜だったのですが、それを見ておられた。そして、おつしやつた。「荒川選手はたった3分間の演技で世界一になった。わしは70年やつてもまだまだだ」。

京都の西側の桂にお住まいだったのですが、近所に桂離宮があります。その当たりを散歩されていた。96歳ですから腰もまがついています。だから、イナバウアーといつてもこれくらいですが、まあこれくらいです(笑)。ご本人はイナバウアーです(笑)。金メダルと取った朝に家族の皆さまを「金メダルを取った!」と起こしてまわつた、そういうエピソードをお持ちの方です。

③の「白川静はメカにも強く……」ですが、白川先生のイメージとしては、どうしても漢字の学者というのがありますので、手書きでなければイカンとか、そういうものがあると思いますが、ところがご本人はかなり新しいもの好きでした。電子辞書は普通にお使いになっていました。広辞苑なんか入っていますから、「このなかに広辞苑が丸ごと入っているのか!」と。お仕事の時も、コピーの拡大・縮小はご自分でなさっていました。お若い頃から、囲碁とか将棋はご趣味でされていまして、新聞の棋譜など切り抜きして残されていきました。将棋はお好きでした。ご家族の中でいつしよにやる方がいなくなりますと、「おとうさん、ゲームボーイ使ってみたら」と勧められ、ゲーム機で囲碁や将棋をされてい

ました。「なかなか定石を知っているな」と。入っているのだから当たり前なのですが。最初は、初級でやるので勝つのです。上級になると、さすがに難しくなり、形勢が悪くなると、「疲れた、はい」と、ぶつちとスイツチを切られた。

95歳の時、ついに近所のゲームセンターに行つて「UFOキャッチャー」をやつてみたそうです。ボタンやレバーを操作して、中にあるぬいぐるみを掴めたそうです。いつしよに行つた人が「お父さん、早く早く」と言つているうちにすんと落ちてしまい、「これは掴んだだけではだめなのか」と、言われた。そういうエピソードが残っています。

④ですが、96歳の最期するとき、病室の上の天井にあるシミが甲骨文字に見えたので、「ご家族を呼んで、「何と書いてあるのだ」とお尋ねになつたのが、意味のある言葉を発した最後だつたそうです。お亡くなりになる直前まで現役の生涯を貫かれた方でした。

②は全くの嘘の話かというところでもないのです。このエピソードは、インターネット百科事典のウイキペディアに載っていたのです。この②のように書いてあつたので、びっくりしてご家族にお聞きしました。ない、といわれました。わたしは、それで、ウイキペディアの事務局に削除してくれと頼みました。いまは出ていません。どなたが書いたか分からないのですけれど、そういうエピソードがあるということになつていたので、ご家族によれば、「お父さんは美食家でもなんでもなかつた」と言つておられました。出されるものは何んでも食べられたようです。

最後に福井に来られたのは亡くなられる四ヶ月ほど前です。2006

年6月に福井市の「ユー・アイふくい」で講演会を2時間ほどなさつたのですが、そのときホテルで食事をされて、全部食べられました。最後のそばを食べられて、「ああ、ひさしぶりだな」と。

漢字の成り立ち

それでは、これから、漢字の話をしていきたいと思います。

漢字というのは、いまから3300年から3500年前の中国でできたものです。そのときの漢字はいまの漢字とかなり違つていまして、お返しした教科書にも出ていますが、いま発見されている一番古い形は、亀の甲羅とか、鹿や牛の肩の骨に彫りつけられているものです。私たちの使っている漢字はそこから形を変えながら変わつてきたものです。



今日はせつかくの機会ですので、亀の甲や牛の方に書かれた漢字を持つてきました。真ん中にあるのが亀の甲羅のお腹の方です。背中ではなくてお腹の方です。もうひとつは鹿の肩胛骨。亀の甲羅や牛の骨などに彫られていたので、甲骨文字といわれているものです。

回します。触っても大丈夫です。レプリカなので。本物なんかもってこられませんか(笑)。彫ったのは10年くらい前です。

中国のお土産さんで買ったもので、3個3000円を1000円にまけてもらった買ってきました。本物そっくりに出来ていますので、教材としては十分なものです。

漢字は、自分たちの身の周りにあるもの、いろんなものを材料にして作ったもので、そこから始まったのですが、人という字もそういうふうにして出来たものです。「人」という字は何から出来たと思われませんか。当然「人」という漢字は人から出来ているのですが、具体的にどんなポーズからできているのか、そのポーズを取ってみてください、というのがクイズです。これを皆さまに考えていただいて、勇気のある方は実際に示していただきたい。いかがでしょうか。

(会場、沈黙。少し間があつて)

勇気のある方はいらつしやいますでしょうか。やる勇気のない方は言葉でもけっこうです。学校の先生は、ご存じだと思いますので、最後にしてください。

(会場から)

「支えあつている形、こういうふう」。

これに賛成の方、はい、けっこういらつしやいますね。
(会場から)

「人が生まれるときの母親の出産の姿勢」

いかがでしょうか。この説に賛成の方？体験された方々はいかがでしょう。ちよつと支持が集まりませんが。

(会場から)

「足を踏ん張つて立っている姿」

こうだと思われる方？、おひとりいらつしやいました。

実はいま回している教科書の中にあります。答えをお見せしたいと思います。

3500年前の最初の形はこれでした。



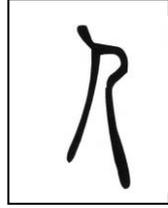
人が横を向いている形です。人が立っていて、手があり

足がある。これが「人」という漢字のもとです。これがどういうふうに変つていったか、みていきましょう。

5000年経つとこういう形になります。これは3000年前の金文。金文というのは、青銅器の器が出来るようになった時代の、そこに鑄込んである文字のことです。



そして、次が篆文(てんぶん)です。篆文というのは筆で書くようになった最初の形で、実印の文字は篆文です。

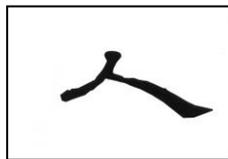


それから、皆さまもお持ちだと思いますが、千円札、お持ちの方は出してみてください。これは回すのははばかれますので(笑)。この表の丸のところ、赤い字で書いてある、裏にも同じように丸の中に書いてある、この字が篆文です。

表の丸い中になんて書いてあるのか、読めますか。一万円札でも五千円札でも同じことが書いてあるのですが。皆さん、毎日お使いなのに読

めないのですか、といったところで、読めなくても使えますと言われるので。まず表ですが、日銀の一番偉い人はどなたでしたか、総裁ですね。右上から下に向かって「総裁」、そして左側は「之印」。これが篆文の形。裏はなんと書いてあるかというと、これは日本銀行券なので「発券局長」と書いてある。いまは、篆文は装飾的要素が多いのですが、この当時は普通にこの字を使っていた。

これは使にくいと、筆書きの形になってきたのが隷書です。実は、お札に、この隷書があります。一万円を見てください。「日本銀行券」、「壹万円」、「日本銀行」、これらが隷書です。



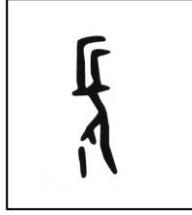
人の隷書が右の形。これも2000年前の字です。

そして、いま私たちが使っているのが、楷書。これは1700年前に完成しました。1700年前に使っていた字をいま私たちが使っている。それでは、この千円札の中で楷書はどこにあるか。真ん中の下、「国立印刷局製造」が楷書です。「野口英雄」はちょっと隷書に近いかという感じですが。お札は漢字の歴史が分かるよい材料になります。

このように、3300年か3500年前にできた漢字はいまから1700年ほど前にいまの形になつてずっと使われています。

文字の歴史からいえば、もつと昔からある文字もあります。エジプトのヒエログラフイとか、メソポタミアのくさび形文字だとか。これらは漢字よりももつと前にできた字です。しかし、これらの字はいまは使われていません。エジプトやメソポタミアではアラビア文字を使っています。漢字はいまもずっと使われている。多分これからもなくなることはないであろうと思われます。21世紀に入つたいま、世界で一番長く使われている文字がこの漢字です。

次のクイズですが、ある漢字を最初の形からいまの形までずっと並べていきます。この漢字は何でしょうか。
いまから3300年前の甲骨文字。



これは小学校で勉強する字です。答えを聞くと「なーんだ」となると思います。そうなんです、実は、これは人間の形です。どういう形なのか、ヒントをお教えします。

この部分は杖で、これは長い髪の毛です。長い髪の毛のお年寄りが杖をついている形です。



金文 (2500年前)



篆文 (2300年前)

(会場から)

「老」ですか。

ああ、惜しいですね。なかなかいい線ついています。同じような考えで行くと、多分、答えが出てきます。

(会場から)

「古」ですか。

「古」は形が違いますね。実は、先ほど説明したときに、答えを出しています。それでは時代をもう少し新しくします。

「二」に三種類の字が並んでいます。これは金文ですが、三つあるという事は、同時期に同じ意味を表す字が三種類出てきたということですね。真ん中がいまの字に近いですかね。右側も近いといえれば近いかも知れません。私は答えを知っているの、何とでもいえますが。

それでは次の段階に行きます。右の図の下がそれです。そろそろお分かりになるのでないでしょうか。分かりましたか。

「お年寄り」ということをばを漢字で言うかどうかという言葉になるでしょうか。そう考えていただくとも出てくるかも知れません。次になると分かってしまうと思いますが、出してみます。



これは2000年ほど前の隸書です。もうお分かりになったでしょう。(会場から、「ああ・」という声)

「長」という字は、元をたどるとお年寄りの形なのです。年長者といいますが、「長」という字は、年長者の形からは始まりまして、年長の方はいろいろ経験をお持ちで、そこから村長、町長、校長などの長、一番上の人を指す言葉に意味が変わっていった。時間的に長いとか、短い長い長さの意味などに広がっていった。お年寄りのことだけであつた字が

いろいろな意味に使われるようになった。それが漢字の特徴です。これが逆に、漢字は難しいな、いろいろな字にいろいろな読み方があつて、となるのですが。

画数と字形

次は画数の問題です。

「次の4つの漢字のうち、画数の最も多いものをその番号で答えなさい。」

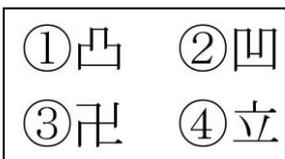
ちなみに一画の漢字はどんなのがありますか。

(会場から)

「いち」

いち、そうですね。もうひとつあります、オツ(乙)、甲乙丙の乙ですね。あれも一画です。それでは二画の漢字は。二(二)、そうですね。ほか何かご存じですか。ジユウ(十)もそうですね。それからほかには。チヨウ(丁)、一丁目の丁ですね。あと、カタナ(刀)もそうですね。

それでは問題をお見せします。



(会場から、「ああ・…」と、ためいきのような、失笑のようなもの)

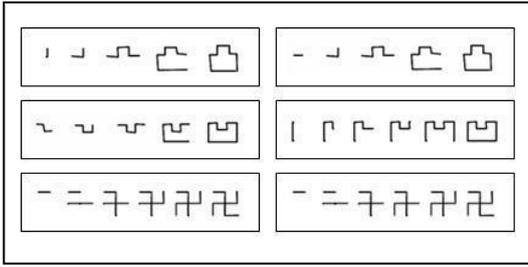
この四つですが、いやですね、こんなのは。この中で画数の一番多いのはどれでしょうか。

まず、これらはどう書くのかとなりますね。分かるのは四番だけだと。なぜ画数が重要になってくるかというと、画数が分からないと辞書が引けないのです。一番のトツ、二番のオウ、三番のマンジ、これらは全部漢字です。四番の立は小学校でも習いますが、実は、一番と二番は常用漢字に入っています。三番のマンジは地図記号として使っていますが、もともとは漢字です。

それでは画数の一番多いのはどれか、お聞きします。

一番と思われる方、はい。二番と思われる方、はい。二番だと思われる方、はい。二番だと思われる方、はい。立は五画ですね。

それでは答えをお見せします。



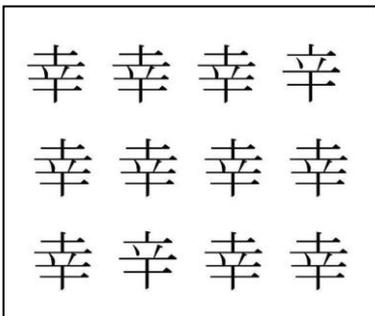
凸は五画、凹も五画、卍は六画、立は五画です。

(会場から、「はっは、なるほど……」など)

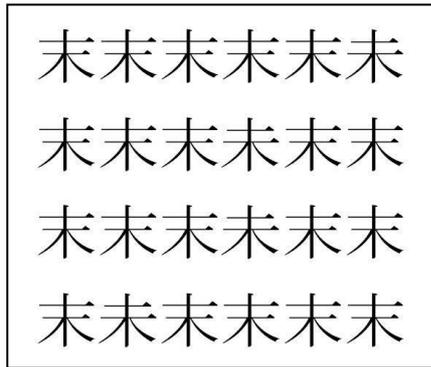
これは筆順という問題になってくるのですが、それが一番大切なのは、漢和辞典を引くときに、画数で引くときに、ルールを決めておかないと、自分でこれは何画と言っても出てきませんので、それで画数のルールが大切です。

図にありますように、漢字の筆順はひとつとは限らないのです。二通り、三通りの筆順の漢字も何個かあります。トツ、オウ、マンジ、これらは二つ以上の書き順があります。トツもオウもこのように書けば、五画になりますよということです。マンジも、ここには二通り示してありますが、このように書けば六画になります。

第六問は字形、「同じ漢字がたくさんならんでいる中に交じっている、違う漢字はいくつあるか。」ちよつと何のことか分からないと思いますので、例題を出します。こんな問題です。



分かりますか。「幸」という字がほとんどなんですけれど、この中にいくつか違う字が入っています。「辛」(つらい)が入っています。いくつ入っていますか。そうですね、ふたつですね。いままでは例題でしたが、これが問題です。



(会場、図を見てざわめき)

ひっかけ問題みたいですが、二つですね。こことここです。字の形というものは骨組みなのです。だから、一本線が違っていると違う字になってしまう字がかなりあります。一つ点を打つとか、一本線が多いとか。そうすることで全く違う漢字になってしまう。漢字の特徴です。

実は、わたし、立命館大学に入る前は、漢字検定協会におりました。そのときに雑誌を編集していたのですが、読者から葉書が来たのです。

「幸」という字

二十三歳くらいの女性の方でした。「辛い」という字に一本線を足すと辛いという字になります。そういうことを教えてくれた彼氏と付き合っています。昔の歌にもありますね、「若い」という字は苦しいという字に似ている」とか。成り立ちは全然関係ないのにそういうことがあります。

ちなみに、「辛い」と「辛い」の成り立ちは、いまは形が似ていますが、全然違うのです。「辛い」という字は本当に辛いのです。これは針の形です。入れ墨を入れる針の形です。昔は入れ墨に大きく二つの役割がありました。ひとつは文身(モンシン)というもので、今でも例えば、南方の民族では装飾ようとか、大人になったときの印とかで、入れ墨をする。もうひとつは、罪人が罰として入れる入れ墨。「辛い」は罰としての入れ墨を入れるときの針の形です。

それでは「幸」という字は。これは、じつは、「辛い」という意味の字ではないのです。手かせ足かせの手かせの字です。手かせは、いまでいう手錠です。大きな木の板にはめ込んで、留める手かせ。手の自由を奪われる、そういうものです。そこから「幸」という字が出ています。いま福井県の学校で使っている白川文字学の教科書にはこう書いてあります。

「手かせをかける刑罰は、死刑などのおもい刑罰と比べ軽かったので、思いがけない幸せであった」

いまは刑罰を受けることはいけないことになっています。昔はずいぶん残忍な刑罰があったので、それに比べてたら手かせはまだましな方だったということですね。これは、本当かなと思われるかも知れませんが、他の字を見ると納得されると思います。

「幸」が付く字にどんなのがありますか、執行するの「執」の字がありますね。これは白川先生の『字統』のCD-ROM版から取ったものです。コンピュータでも使えるようになっていきます。「執」の甲骨文字はこんな形です。



「手に枷をくわえて罪人を拘捕することを用いる」。捕らえる。手かせがはめられている形ですね。

さらにもうひとつ、「報復」の「報」です。「むくい」という字です。こういう形です。



さっきの「執」に似ていますね。右側に何か形が付いていますが、これは何の形かという手、手の形です。どういふことかという、ああ、せつかくですからお手伝い願いますか。私が手かせをはめられますから、後ろから頭をこづいてください。そう、こんな形です。

つまり、罪人を後ろから押さえつけている形です。そういう罪人の姿、それが「報」です。罪を犯した報い(むくい)ということですね。この「幸」が全て手かせであることがお分かりになると思います。

「幸せ」の「幸」が手かせであるとも聞いても、そうかなと思われるかも知れませんが、この「幸」の付いている他の字と比べてみると、納得していただけるのではないかと思います。

漢字文化圏

最後のクイズです。漢字文化圏に関するものです。

漢字を使っている国は、中国、日本、それからどこがありますか。今でも使っている、あるいは漢字に基づくものを使っている、あるいは今は使っていないけれど昔は使っていた、そういう国ですが、中国、日本に比べて、そう、朝鮮半島ですね。昔はベトナムも使っていました。したがって言葉がよく似ています。

韓国ドラマなどを見ると、たいがいはハングルで書いてありますが、むずかしい言葉は漢字で書かれています。韓国語の「こんにちわ」にあたる「アンニョンハシムニカ」の「アンニョン」は「安寧」、「やすらか」というこ

裴○俊 배용준			
①勇	②龍		
③容	④庸		

とですね。「お元気でいらつしやいますか。」という言葉ですね。それでは漢字文化圏のことですが、この方はどなたかご存じですか。そうですね、ペヨンジュンですね。では問題です。ペヨンジュンのヨンという字は漢字で書くときどれでしょうか。「ヨン様」のヨンはどの漢字でしょうか、という問題です。

この四つは全て韓国では「ヨン」と読みます。ヨン様のイメージはどれでしょうか。それではいきましようか。①の勇ましいと思う方、②の龍だと思ふ方、③の容、姿だと思われる方、④の凡庸の庸、平凡などと思われる方、(会場、それぞれ手を挙げる)

それでは答えです。ペヨンジュンのヨンという字は、この字です。「勇ましい」の「勇」です。韓国の人たちは自分の名前くらいは何とか漢字で書けるのですが、ハングルを使っているので、漢字文化圏ではあるのですが、元の漢字をどう書くのか知らない。例えば、日本の小学生が「ケータイ」と仮名で書いてあると、もとは「携帯電話」から来ているのですが、漢字でどう書くか知らないし、あれは「ケータイ」というものだ、そ

ういう理解の仕方だと思えますが、韓国もそのようなことです。いままで、クイズ形式でいろいろあげてきましたが、それらは漢字の持ついろんな要素を含んだ問題でした。それではここでいったん休憩して後半の質疑応答に移りたいと思います。

早川 ありがとうございます。

いつ漢字が日本に入ってきたのか

久保 今回、なぜ私がお招きいただいたのかと伺いましたら、現在のいわゆるカタカナ言葉の氾濫、これはどうしたことなのか。それで、元の漢字のことを知りたいということと呼ばれたということでした。さつきも「ケータイ」ということでありましたが、これは単なる記号のようなものになってしまっている。なぜ、「ケータイ」というのか、よく分からなくなっている。

いまの世の中、外来語と言ってよいのかと思うほど、カタカナ語がどんどん入って来て、何を言っているのかよく分からない言葉があります。こういう状態がどれくらい前からあったのかというと、漢字もそうなのです。つまり、日本にはもともと、文字がなかったというのが定説です。漢字が入って来る前には日本には文字がなかったというのが学界の定説です。その当時どうやってやっていったか、みてみます。

漢字ができたのは、中国で、いまから3300年から3500年ほど前

です。日本に入ってきたのはいつかというところ。古事記や日本書紀(久しぶりに名前が出てきたかと思いますが)に、こういうふうを書いてあります。

古事記の応神記。応神記とは、応神天皇の時に完成したものです。

「名和邇吉師、即論語十卷、千字文一卷、并十一卷、付是人即貢進」

「ナハワニキチシ。スナワチロンゴ十カク、センモジ一カク、アワセテ十一カク。コレヲツケテヒトニミツグ」。四世紀末の話となっています。

日本書記も応神天皇の時、もつと詳しく応神15年とあります。

「阿直岐亦能讀經典。即太子菟道稚郎子師焉」

「アジキヨクマタヨクキョウテンヲヨム。スナワチタイシウヂノワキイラツコシトス」

同じく、日本書紀の応神記十六年には、

「十六年春二月王仁來之、即太子菟道稚郎子師之。習諸典籍於王仁。」

「十六ネンハルワニガツワニコレニキタル、スナワチウヂノワキイラツココレヲシトスル。モロモロノテンセキラワニナラウ」

古事記では「和邇」、日本書紀では「王仁」と表記されていますが、どちらも同一人物です。ワニです。古事記や日本書紀によると、この時代に中国から朝鮮半島を経由して漢字が来た。その前に、朝鮮半島からワジキという人が日本にやってきて皇室の若いひとたちがその人について漢字を勉強していた。あるとき、ワジキが「私の祖国の百済にはワニ

という人がいてもつと読める人である」と言った。それでは、ワニさんを呼ぼうとなった。それでワニさんが日本にやってきた。古事記によると、ワニさんが最初に論語を持って来た。

古事記ができたのは712年、八世紀です。日本書紀も八世紀です。八世紀にできた本に四世紀のことだと書かれている。400年前の話です。いまなら、400年前と言えば江戸時代ですから、その頃のこととはよく分らないですね。八世紀ごろで、その400年前といえ、さらに分らないです。つまり、書かれていることは言い伝えなのです。言い伝えを文字に起こしたのがこれらの書物に書かれていることです。だから、本当かどうか、あやしい。

あやしいといいましたが、実は間違いないのです。なぜかというところ、古事記の中に「千字文」とあります。これは、子どもに漢字を教えるために用いられた漢文の長詩で、「天地玄黄、宇宙洪荒」など、四字ずつで250組、合計で千字ですが、これらは全て異なった文字が使われているものです。これは六世紀にできたものです。文官であった周興嗣(409-482)が一晚で作ったとされています。周興嗣は一晚で頭の毛が真っ白になったというエピソードがあります。公式記録としては、「千字文」は六世紀のもので、ところが、さっきの古事記では、四世紀となっている。なぜ、できていないものが伝わってきたとされたのか。古事記に書かれていることは、研究していくと、あやしいのがあるのです。

正倉院の宝物庫(これは八世紀)の中には、確かに、千字文があります。したがって、古事記のこの記録はあやしいとなります。

漢字といえば、金印ですね。金印にはこう書いてあります。これは中国の記録にちゃんと残っています。西暦57年です。本物は福岡市博物館にあります。レプリカをもっていますが、ものすごく小さいです。

「金印

「漢委奴國王」、「カンノワノナノコクオウ」と読むようにはいわれていますが、ふりがなが振ってあるわけではないので、本当にそう読んだかどうかはわからない。57年(建武中元二年)と書いてあるのだから、漢字が入って来たのが57年かというところ、そうとも言えない。なぜかというところ、この金印の字が読めたかどうか分からないからです。あの当時の超大国である中国(漢)から、「野蛮な人たちが海を越えてやって来たのだから、よしよし、それではこれを授けてやろう」と、貿易もいだろうと、大きな漢の国の一国として認めてもらったのが金印なのです。しかし、これをもたらした奴(ワ)の国の人たちが読めたかどうかあやしい。これをもつて漢字が入って来たとしていいかどうか。

本当に漢字を使ったのだなと思われるのが五世紀くらいです。埼玉県で鉄剣が見つかって、そこに文字が書かれていた。漢字を使っているのが分かります。

万葉仮名とかな

先ほども言いましたが、文字はなかったが言葉はあったのです。しゃべっていた言葉、それはあったのですが、そこにどつと漢字(文字)が入って

来た。それを使うにはどうしたかというところ、自分たちの言葉にそれらの文字を当てはめていった。万葉仮名です。これがそれです。

難波宮跡からでた木簡に万葉仮名が使われています。七紀中期、西暦六〇〇年中ごろのものです。いまの漢字に直すところになります。

「皮留久佐乃皮斯米之刀斯」、読めますか。音読みです。「ハルクサノハジメノトシ」。漢字の音をそのまま日本語の音に当てはめた、いわば当て字です。

現在の状況もそのときと変わらないと思います。初めて入って来たものをそのまま受け入れている。

万葉集の中の額田王の歌です。

「熟田津尔 船乗世武登月待者 潮毛可奈比治 今者許藝乞菜」

漢字がずらずらと書いてありますが、訓が出てきます。「ニギタツニフナノリセントツキマテバ シホモカナヒヌ イマハユギイデナ」と読みます。「熟田津」などは完全に当て字ですが、「船」や「乗」は漢字の意味をそのまま使っている。次の「世武登」(セント)は当て字、ごちゃ混ぜにつかっています。これではとても使いにくい。漢字はあくまでも中国語を表すためのものなので、日本人が使うには不便です。そこから、平安時代に仮名が生まれるのです。自分たちの言いたいことをそのまま表せるような表音文字ができた。

漢字の廃止ないし制限論

実は、昔の人も漢字がいやだったのです。漢字を廃止しようとか、制限しようという考えは江戸時代から現れています。このような人たち（賀茂真淵『国意考』、本居宣長『玉勝間』、前島 密『漢字御廃止之儀』が漢字つて面倒だなど言っています。賀茂真淵や本居宣長は国学の大成者です。イメージとしては、漢字が大切だと言いそうな人が、あれはもともと日本本来のものではない、入って来たものだ、日本本来のものを大切にしたいと言っている。漢字は不便だと。

賀茂真淵は『国意考』の中で、簡単に言うと、こんなことを言っている。

「漢字は三万八千字ほどある。例えば、花の一つにも、開く、散る、薬（しで）、樹（き）、莖（くき）など、その他十ほどの字なくてはならない。それから、この国の名前や草木の名前に別々の一つずつの字を使っている」。これが漢字の特徴です。一つの言葉に一つの文字を使っている。言葉イコール文字、その結果が三万八千の字。地名なんかもそこにしか使わない字がある。

それでは外国ではどうか。

「インドでは五十字で五千余巻の仏の語を書き伝えている」。梵語です。五千余巻の仏典はわずか五十字で書ける。「オランダは二十五字とか。北国は五十字」。この、北国がどこのことか分かりません。「大方の国ではこの程度なのに中国だけこれほど多い」。このことを思わないで字が尊いと思うのは言うにもたらず」。漢字はそれほど尊いものでないのだよ、と国学者が言っている。

慶応2年（1866年）に、前島密が時の将軍徳川慶喜（最後の将軍ですが）に、漢字をやめたら、と意見書を出します。前島密の『漢字御廃止之儀』です。前島密は郵便制度を作った人です。

「國家の大本は國民の教育にして其教育は士民を論せず國民に普からしめ之を普からしめんには成る可く簡易なる文字文章を用ひざる可らず」、「御國に於ても西洋諸國の如く音符字（假名字）を用ひて教育を布かれ漢字は用ひられず終には日常公私の文に漢字の用を御廢止相成候様」。漢字を使わないでいいながら、漢字がいっぱいありますね。

今はしゃべる言葉がそのまま文字になりますね。今日のこの話もそのまま文章として書けます。当たり前のようですが、そのようになったのは明治の中期頃になってやっと出来上がったのです。それ以前は話し言葉と書き言葉は全く別のものでした。しゃべっているときは普通にしゃべつていても、書くときはここにあるような書き方だったのです。「漢字の用を御廢止相成候様」のように。当時の知識人はこのような書き方ではないと自分の論理思考を表すことができなかつた。だから、このような漢字がいっぱいの書き方になっていきますが、それでも漢字はやめた方がいいのでないかといっている。前島密の意見は慶喜に受け入れられませんでした。

明治になつても漢字をやめた方がいいのでないかという意見は出たのですが、そうはならず、漢字を制限しようという方向になっていきます。

福澤諭吉には『文字之教』があります。即廃止論でなく制限論です。

「漢字ヲ全ク廢スルノ説ハ願フ可クシテ俄ニ行ハレ難キコトナリ 此説ヲ行ハントスルニ六時節ヲ待ツヨリ外ニ手段ナカル可シ」、「ムツカシキ漢字ヲバ成ル丈用ヒザルヤウ心掛ルコトナリ。ムツカシキ字ヲサヘ用ヒザレバ漢字ノ數ハ二千カ三千ニテ澤山ナル可シ」。福澤諭吉は実際やつてみたのですね、どれくらい漢字でこと足りるか。すると、二千くらいでいいと。今の常用漢字は二千百です。これでいけるのではないかと書いています。福澤先生は面白いことを言っています。「漢籍ノ素讀ナドヲ以テ子供ヲ窘ルハくるしめるは」。無益ノ戯ト云テ可ナリ。「子曰く、……」などと子どもに読ませるのは無益の戯れだと。

明治初期になされた翻訳作業

一方で西洋からたくさん文献が入って来る。新しい言葉、新しい概念がどんどん入って来た。最初はそのまま使っていた。例えば、デモクラシーとか、フィロソフィーとか。そういう言葉を使っていたがなんのこともわからない。明治の知識人は漢文の素養がありました。また、超大国である中国の文明に明るく、それらは全て漢字でした。自分たちがもっていた言葉で新しく入って来た言葉を、漢字を使った言葉に置き換えることを始めた。

例えば、経済、自由、政治、科学。これら、今私たちが普通に使っている言葉はこの時代に作られた言葉です。フィロソフィーは哲学と訳され

た。漢字に訳されたので、漢字をみれば、なんとなくどんなことなのか分かる。当時、中国から留学に来ていた人たちによって、逆、中国に持つて行かれた。今では中国でも科学や自由や政治や経済という言葉は普通に使われている。

日本ではこういう翻訳作業が行われたので、自分たちの言葉で書き思考することができますが、例えば、アフリカなどで多民族からなる国でこういう作業がなされなかつたところでは、公用語が英語であつたりフランス語であつたり、している国があります。難しいこと、新しい概念などは英語やフランス語でないとできないようになってる。実は東南アジアでもこういう事情の国があります。

日本では明治の初めに漢字による翻訳がなされたおかげで、大学の教科書も日本語で書かれています。みんな普通に読める。

今はどうかという、明治の初めの時のように、新たに自分たちで言葉を作る能力が失われているように思われます。例えば、今のカタカナ語、例えばそれが英語の場合、英語本来の意味で使っているかという、それでもないように思えます。

なにか難しい話になってしまいましたが、ここからは質問をお受けしたいと思います。

後半の質疑応答

早川 それではいつものように、ここからは質疑応答の時間とします。

白川先生の日常と研究活動

早川 白川先生の人となりの話がありまして、とても規則正しく生活されていたことでしたが、私も94歳の時に福井で講演を聴きましたが、かくしゃくたるもので、おおきな紙に昔の字を書いて話されました。驚いたようなことでした。先生は健康維持のために何か気をつけておられたことはありませんでしたか。

久保 そうですね、先生は八十何歳から講演活動を積極的にやり始められました。福井には94歳の時に来られまして、2時間立つたままとうとうとしゃべられた。先生は古代文字を次々と書かれていきます。全て覚えておられた。なぜこのようなことができたのか。

若いときに研究を始められた。こういう甲骨文字はきれいな形が見つかるとは余りなくて、3000年ほど地面に埋まっていますので、ばらばらで出てくるのが多いのです。骨の一部とか。いまならコンピュータでスキャンして投射して、この字はこれと同じかなとかできるのですが、昭和30年代ですから、もちろんできない。それでどうされたのかというと、その当時甲骨文字の拓本が出ていた。それを一枚一枚、薄い紙にトレースしていった。薄い紙を当てて上から骨の形を書いて、文字をなぞっていった、だいたい一二万点くらい写していった。それを元に自分で、パズルみたいに組み合わせていった。ここ一つしよだなとか、この

文字はちょっと違っているとか、そういう基礎研究をかなりやられた。それで講演の時に模造紙に次から次へと書かれていた。

先生はどうしてそんなにお元気なのですかという話があつて、さつき94歳で講演をされたとありましたが、私が最後にお目にかかったのは亡くなる一ヶ月前でした。2006年10月30日に96歳で亡くなられたのですが、私がお目にかかったときは普通に仕事をされていました。90歳の時に研究計画を立てられて、120歳まで生きる予定でした。10年で研究を完成させ、あとの20年は自分の好きなことをして過ごす、そういう計画でした。

さつき規則正しい生活をされていたという話がありました。これはご自分が長生きをしようとか、そういうことではなくて、ずっとそれが習慣になっていただけで、それが結果的によかった。時々、先生、入院はされていたのです。身体を休めるという意味で。大病はなさっていません。夏場など時々しんどくなる時に入院されていた。無理はされませんでした。それでは一日20枚の原稿を書くのはむりではないかと。そうでなく、自分は好きなことを好きなようにやっていた、それがひとから見るとすごいことだった。

ご遺族の方に伺うと、普通のお父ちゃんでしたということ。大学者なのですが、家族には普通のお父ちゃんでした。食べ物も制限されていなかった。美食家ではなく、何が食べたいかときかれたとき、豚の角煮を食べたいとか、そういうことを言われた。出されたものは何でもおいしく食べられた。学問に関してはどん欲だったかも知れませんが、他

のことに關しては無欲というか、自分の思うままに好きなことができ
た。それが結果として長生きされたのでないでしょうか。

国字

参加者 A いろんな文字に音読みと訓読みとがありますが、訓読みは
多分日本でできたのではないかと思いますが、訓読みしかない文字、例え
ば峠、これは日本で作った文字だと聞いたのですが、これは正しいのか
と。それから、韓国や台湾や中国で通用する、日本で作った文字があ
るのか、この二点です。

久保 音読みと訓読みですが、訓読みがあるのが日本の漢字の一番大
きな特徴です。例えば、山。これは訓読みが「やま」で、音読みが「さ
ん」ですね。「せん」もそうです。これはどういうことかという、漢字
が入つて来る前は、しゃべっていたから当然言葉はあったのです。「やま
と」かいていたのです。中国から文字が入ってきたときに、「山」の字を
見て、これはどういう意味ですかと訊ねると、あそこにあるあれだ、あ
あ「やま」かとなる。そのときの中国人がどう言っていたかという、
「山」の字に、「さん」とか「せん」に近い発音だった。一方で、読み方(中
国の音)をそのまま受け入れた、もう一方で、「山」の字は私たちの「や
ま」だから、「山」を「やま」とも読もうとしましょうと、これが訓読み
です。おっしゃるとおり、訓読みは日本でできたものです。中国で「山」
を「さん」といつていたかどうか、あやしいです。今の中国では「しん」と
いう。

もうひとつの質問にあった「峠」ですが、これは日本でできた字です。
漢字の作り方を学んだ日本人は、自分たちの言葉にあつてその字がな
かつたもの、それは当然文化と関係するのですが、そういう漢字を作
りたくなつた。「とうげ」という言葉にびつたとする漢字が中国にないの
です。このところが面白いところです。それで、日本で、山偏に上と
下を組み合わせて「峠」を作つた。ちょうど、山道を登つて下るところ、
そこが「とうげ」なので、「峠」とした。

同じような発想で、衣偏に上と下を組み合わせて、袴(かみしも)と
いう字を作つた。「かみしも」は中国にはありませんから。

これらを国字といえます。ほかにどんな例があるかという、小学校
で勉強する漢字ですが、「畑」です。これは日本で作った漢字です。中国
では「たんぼ」と「はたけ」の区別はなく、どちらも「田」です。水田か乾
田なのです。日本では、焼き畑もあつたかと思うのですが、そこから火
偏の「畑」を作つた。睥臓、「睥」という字も国字です。

これら日本で作った漢字には訓だけで音はありません。しかし、例外
があつて、同じく小学校で学ぶ、「働」(はたらく)。人が動くので「はた
らく」。これは「どう」という音読みがあります。

これら日本で作った漢字が、ごく一部ですが、中国に輸入されて中
国で使うようになった字もあります。さっきの「働」。これなんかは一時
期中国で使われていました。「労働」という言葉で。今の中国では人偏
を取つて「動」になっています。

最近の例で言いますと、「鱈」(たら)。これももともと中国にはなかつ

た字です。自身の代表的な魚として「鱒」を日本で作った。日本のほうが魚の種類が多いので、中国から来た字だけではまかないきれなかった。魚偏の付く字は日本で作ったのが結構あります。それらは中国に輸出されて使われています。「鱒」が中国で使われるときは、発音は、「雪」の方の音でなされています。「しゆえ」。

一番困るのは、日本でできた漢字が名字にある場合、例えば「辻」さん。「辻」も日本でできた漢字なので、中国に行くところの字がない。呼ばれるときは、「十」のほうの音で呼ばれる。「峠」などはどう読んでいいかわからない。どの部分を読んでいいかわからないので、この場合は「とうげ」と読んでいます。

白川先生と『説文解字』

早川 中国の辞書、『説文解字』はとても権威のあるものとお聞きしましたが、白川先生の仕事はそれに戦いを挑むような、そのような馬力はなぜあったのか。

久保 ここに『白川静博士に学ぶ 楽しい漢字学習 5年』がありますので、これにエピソードが載っていますので読んでみます。

「今から約1900年前、中国に許慎(きよしん)という人によって漢字の成り立ちを説明した『説文解字』という辞書が作られました。『説文解字』は秦の時代の漢字をもとにして作られ、長い間もつとも信頼できる辞書とされていました。」

漢字は三千数百年前にできたものです。そのときの中国の王朝は殷だったのです。殷が滅んで周になった。中国の常として、王朝が変わるといことは違う人(民族)による王朝になることなので、前の時代のものは徹底的に破壊して、よそに移ってしまうのです。つまり、殷の人たちがせつかく作った文明を周の人たちは一顧だにせずに、よそに都を作ってしまう。それで、それまでのものは全部地面に埋まってしまった。『説文解字』を作った許慎は紀元100年頃の人ですから、昔の字は知らなかった。ほんのちよつと前の漢字をもとに解説を書いた。しかし、漢字はもつと前からありました。

実は、このような昔の漢字が発見されたのは、100年ほど前なのです。3200年ずつと埋まっていたやつと発見された。1899年のことといわれています。ここで発見された文字は、『説文解字』が書かれた時代よりもつと前の時代のものだということで、研究が始まった。1910年とか、そういう時代です。

白川先生は福井市の順化小学校を卒業されて、その当時は義務教育は小学校だけだったので、大阪に奉公にでます。奉公先がお店でなくて、弁護士の家でのちに国会議員になる人の家で、書生として入られた。このときに議員さんが東京に行くことになったときに、自分の家にある本は自由に読んでいいよと言われた。あの当時の国会議員の方は漢籍の素養があつて、中国や日本の古典がいっぱいあつた。十何歳、今の中学生くらいの白川少年はそれらをずつと読んでいた。その議員の先生が支持者に漢文で手紙を書いたり、漢詩を書いたりしていた。今新

間に俳句欄や短句欄があるようにその当時は漢詩欄があった。一般人が漢詩を作つて投稿するような時代でした。

支持者に漢文の手紙や漢詩を送つたりするのですが、支持者は「すごいですね」というけれど、実は残念ながら読めない。そこで、白川少年に「これなんて書いてあるの」と訊いた。白川少年は分かりませんと言えないので、自分で勉強した。そのときに、一生本を読む生活をしたいと思つた。ただ本を読むだけでは生活ができないので、中学校の先生になるのが一番だと思つた。小学校しか出ていないので教員免許が取れない。それで、まず、昼間働いて夜学に通つて夜学の立命館に入った。その時期が、たまたま、甲骨文字の研究が始まつた時期とぶつかつた。新しい学問だったので。

なぜ、そんなに日本でたくさん研究できたのかというと、そのときの中国の状況と関わっています。1899年というのは中国の清朝が終わろうとする時代です。清朝が終わつて中華民国が出来る、そのような時代です。清朝のお偉らさんは、政治家でもあり軍人でもあり文化人でもあり学者でもあつた。そんな人たちが研究していた。清朝が終わつて中華民国になると、その前の時代の人は追われる立場になりますから、あるひとは殺され、あるひとは自殺し、あるひとは亡命します。けっこう日本に来たのです。そのときに自分の研究成果をいっしょに持つて来ている。日本で印刷や発行されたものが多いですね。それで日本でそういう資料が手に入った。

白川先生は、最初にお話ししましたように、万葉集がお好きでした。

万葉集がただ好きだったというより、日本人はなぜこのような歌を詠むのかなと、そういう関心だった。それには、中国最古の詩篇である詩経と比べるのが一番だ。詩経を勉強するために漢字を勉強しよう。漢字を勉強し始めると、その成り立ちに関心が向く、そうすると辞書では飽き足りないもので、やっぱり古代人の心に触れるのが一番だ。もう、その辞書を見るよりも、自分で古代人になつてみよう。単なる思いつきでなくて、勉強されて、ご自分の文字学を作られた。

先生にいわせると、文字学をやるうと思つてやつたのでなくて、たままたまやつてみたことが好きで続けられた。

外国名の漢字表記

参加者B 外国の国の名前が漢字で書かれています。あれはどうしてあつたのですか。発音から取つているようではないし。

久保 一番よく目にするのは、「米国」ですね。お米を食わないのになにが「米国」だと。フランスは「仏国」ですね、仏教に関係ないのに。日露戦争というときの「露」ですね。外国名を漢字で書くのには、いろんな流れがありますが、漢字は中国から来ているので、まず中国ではどういふふうにかいたのか。日本語の発音と中国語の発音は違うので、例えば、イギリスは「英国」ですね。「英」という漢字、これは中国語では「イン」と発音します。イングランドのインと似ているので「英」という字を使った。中国の音から当て字にしたものがあります。

たまに日本の音を当て字にしたのがあります。アメリカは、日本史でよく出てくる日米和親条約では、「米利堅」(メリケン)となっています。

メリケン粉のメリケンはここから来ている。「アメリカン」の「ア」が聞こえなくて、「メリケン」と聞こえた。「メ」の音に中国では「美」を当てて「美利堅」。それで今中国ではアメリカを「美国」と書いている。日本は「米利堅」から「米国」になっている。ドイツは「独逸」、当て字ですが、「独」でドイツを表している。

国名を漢字で書く、何通りもの書き方があったのですが、一つに固まってきたのが、今の日本のやり方ですね。

音訳の他意識もあります。例えば、サンフランシスコは、「桑港」と書く。「桑」は中国語で「サン」と発音する。サンと発音する港だから「桑港」。「サンフランシスコ」を全部音訳しているのでもない。あと、例えば、ハリウッド。「聖林」と書きます。「柎(ひいらぎ)」の意味のホリーと「聖なる」の意味のホリーとは字も発音も違うのですが、こっちゃんにしてみました。柎と書かずに「聖林」にしてしまった。これは誤解からできたものです。

明治のものを見ると、同じものがいろんな字で書いてあります。それがだんだん固まってきたのは、国や政府が使つて、あるいは新聞なんか使つて、習慣化されてきたからです。

「米国」、「仏国」、「英国」などは、日米、日仏、日英などと書きますが、ロシアは「日露」と書かずに「日ロ」と、ロシアをカタカナで書いているのは、「日露」では昔のロシアといっしょになってしまうからでしょう。

和仁墓

早川 湖西線に「和邇」という駅がありますが、あれは先ほどの和邇さんと関係あるのですか。

久保 関係ないと思います。「和邇」というのは、当て字です。「ワニ」は、古代の日本語でサメを指したり、大きな魚とかを指す言葉です。それでは琵琶湖にサメがいたかというところ、それは違うと思います。先ほどの「ワニ」博士の場合、二種類の表記がありましたね、「和邇」と「王仁」。あれは「ワニ」と聞いた人が「和邇」、あるいは「王仁」と書いたので、滋賀県の「和邇」は「ワニ」博士と関係はありません。

ワニ博士と関係があるのは大阪の枚方です。枚方市に伝王仁墓があります。ワニ博士が日本のどこかで死んだのに違いないと、その墓と伝えられているものが枚方にあるのです。枚方は今それで町おこしをやっています。漢字の町だと。毎年、枚方漢字祭りがあります。

シン、龍、虹

早川 このあたりでは猪のことをシンといいます。シンというとライオンのイメージがあるのですが、獣一般をシンというのですか。

久保 シンには二つ意味があつて、一つは肉という意味。「肉」という漢字がありますね、あれは音読みなのです。訓読みではありません。音読みがあつて訓読みのない漢字がありますが、「肉」もそのひとつです。

「幕」もそうです。花の「菊」も。これらは音読みです。「シシ」はもともとと日本語です。「肉」という意味の日本語です。もうひとつ字があるのです。うかんむりに六と書く「宀」。あれの意味は肉なのです。いまでいう「肉」を指す言葉として、日本語に「シシ」という言葉があったのです。「イノシシ」ですが、「イ」はもともとの動物の名前です。だから、「イノシシ」は「イの肉」ということです。

それでは「ライオン」の方のシシですが、あれは全く偶然に同じになっってしまったので、「ライオン」はもともと中国にはいませんでした。あのシシという漢字、「獅子」の「獅」はかなり後にできた字です。当然のことに甲骨文字ではありません。あれは「ライオン」がどういうものか中国で分かっただけの字です。獣偏の師、獣のマスターです。百獣の王。その「獅」に子どもの「子」が付いています。これは中国ではあることで、例えば、「椅子」の「子」。「獅子」という漢字ができて、その発音がたま「シシ」だったわけです。それが日本語に入った。

参加者B ドラゴン、「龍」はどのような説明になりますか。

久保 これも中国人のすごいところで、いないものまで字を作ってしまった。龍の考え方は古代中国からありました。龍は甲骨文字からあります。



甲骨文字の時代から龍の存在を意識して、想像上の動物ですが、それを文字にしてみました。天を翔る細長い動物がいたとした。象形文字ですね。龍がいるという想像は中国ではずいぶん昔からあったことが分かります。龍の仕業だと思っようなこととして、細長いものという意味で蛇がありますが、あれも似通ってきます。これが蛇です。



右側がゴブラみたいですね。篇の虫ですが、これも「ヘビ」からできています。



実際自分たちが見たへびと想像上のリュウとも結びつけて「龍」の漢字を作ったように、ニジを見てあれも実は動物だと思った。ニジは「虹」と虫篇になっています。雨のあとに空に大きくかかるので、へびとかリュウの一種だと思った。あれは二つの首のあるリュウだと考えた。雨が降ったあと、リュウが天から下りてきて水を飲んでる姿だと思った。それで、ニジには虫偏が付いている。

ニジには雄と雌がいたことになっています。はっきりと見える虹とちよ

つと落ち着いて見える虹とがあります。はつきりと見える方が雄で「虹」、落ち着いて見える方を「蜨」という字を使っている。

「蜨気楼の「蜨」ですが、これにも虫がある。「蜨」はハマグリです、「気」は空気です、「楼」は建物です。「蜨」はハマグリが貝殻から足を出している姿から来ています。あの「蜨気楼」は、海にいるハマグリが空気をプワ―と吐いて海の上に来た建物だと。今のように科学的に解釈するのではなく、見たままそこから自分たちで作り上げて解釈して、それを字にしていた。

早川 それでは時間になりましたので、本日はこれで終了とします。久保先生には長時間にわたり興味深い話をしていただき、ありがとうございました。皆さま、拍手でお礼を申し上げます(拍手)。

久保 皆さま、土曜日の夜にも関わらずお越しくださいます(拍手)にありがとうございます。

資料

一・参加者(20名)

岡由美、小野義一、柿本義孝、黒瀬春野、小林和子、小林宏子
小森哲彦、治部ひろみ、下西孝明、田歌昇、田辺隆幸、坪川博之
坪内彰、畠中稲子、早川千春、早川智子、早川真理子、早川博信
細川幸夫、堀口勝史

二・発言者(2名)

参加者A(60代、男性)、参加者B(40代、男性)、